

古活字本『伊曾保物語』の肯否疑問文

濱 千 代 い づ み

A Study of Yes-No Questions in *Isoho Monogatari*

Izumi HAMACHIYO

Abstract

This paper investigates the features of yes-no questions in *Isoho Monogatari*, *Kokatsuji* Version of Aesop's Fables, focusing on the forms and their usages. The results are as follows:

1) In ancient Japanese, the forms of yes-no questions were classified in three types: the bound endings “*Kakarimusubi*”, “*ya*” at the end of the sentence, and “*ka*” at the end of the sentence. At the early Edo period, when the work was published, the form “*ka*” at the end of the sentence was used in daily conversation, while all the three forms of yes-no questions are found in the work.

2) The form of the bound endings appears only in the sentences where the narrator expresses the doubts, which shows that the form was not used universally in the work.

3) The “*ya*” form and the “*ka*” form at the end appear in conversations. The “*ya*” form is used when the speakers induce confirmations of the listeners' willingness. This had already been in use long before this era. This “*ya*” form was, however, sometimes used to ask for the listeners' judgment.

These observations lead me to presume that the Jesuits must have translated Aesop's Fables into Japanese in pseudoclassical style at first.

索引語

肯否疑問文 伊曾保物語 文末助詞形式「一や」 係り結び形式 判定

1 はじめに

本研究の目的は古活字本『伊曾保物語』の疑問表現のうち、述べられた内容が成立するかどうか分からないことを表すものを取り上げ、その形式を文脈の中で表す意味との関わりを中心に整理分析し、特色を把握することである。

我々は子どものころよりイソップ寓話集に親しんできたが、日本に初めて紹介されたのは1593年刊記の天草版『エソポのハブラス』である。江戸時代初期には古活字による『伊曾保物語』が刊行され、寛永十六年（1639）の刊記のものが伝わっているので、成立はそれを下らない。古活字本と天草版とは共通の文語祖本が存したであろうと推察されるが、天草版の下巻に相当する部分は双方の収録寓話に大きな相違がある。疑問表現を考察するのに、室町時代末期の話し言葉を反映している文献として、天草版はしばしば取り上げられるが、古活字本は文語文体が基調であるためか取り上げられない。しかし、古活字本には寓話集という性格から会話文が多数見られ、

疑問文も多く拾える。また、江戸時代を通じてよく読まれたので、当時の人々の感覚に沿った文体である。古活字本『伊曾保物語』の疑問表現の分析には意義があると考ええる。

調査に用いるのは日本古典文学大系『仮名草子集』に収録されている「伊曾保物語」である。これは無刊記第一種に分類される国立国会図書館蔵本を底本にしている。無刊記第一種本は『伊曾保物語』諸本の中でもっとも古いと推定されるものである^(註1)。これを〈伊曾保〉〈伊〉と略して呼ぶ。また、調査の過程で影印、天草版、宮内庁書陵部蔵本、寛永十六年刊記本、万治二年整版本^(註2)も参考にし、それぞれ〈エソポ〉〈エ〉、書陵部本、寛永本、万治本と略して呼ぶ。書陵部本は無刊記第五種に属し、第一種の本文をうけたものようである。第一種がもとの本文を誤ってうけつぎ、第五種が正しくうけついだと見られる部分が存在することから、第五種が拠ったのは第一種のもとになった本とも考えられている。万治本は文意が通るように手を加えた跡があるが、大部分が寛永本の本文に合致し、寛永本は第五種の本文にほとんど合致する^(註3)。なお、読みやすくするために、歴史的仮名遣いに直し、送り仮名を適宜付し、踊り字をかなに直すなどの手を加えて引用する。

ここで疑問表現というのは、疑いや問いを表す文のことで、三種類の形式に分けられる。第一に、わからない部分の内容を疑問詞によって表す文で、これを疑問詞疑問文（WH 疑問文、補充疑問文ともいう）と呼ぶことにする。第二に、述べられた内容が成立するかどうかかわからないことを表す文で、これを肯否疑問文（YES/NO 疑問文、真偽疑問文ともいう）と呼ぶことにする。第三に、わからない部分を選択肢で示す文で、選択疑問文と呼ぶ。それぞれ例をあげると次のようである。括弧の中に日本古典文学大系『仮名草子集』の頁・行を示す。

(1) 「その徳いかほどあるぞ。」と問ふ。(398-6)

(2) 我汝を買ひとるべし。そのとき逃げ去るべきや。」と仰せければ、(363-7)

(3) 母上のあるかせ給ふは縦ありきか、そばありきか。」と笑ひければ、(453-13, 14)

疑問表現は疑いや問いの意味を表すばかりでなく、その延長線上にある反語や詠嘆、勧誘等の意味を表すことがある。ここでは用例を広く集めるため、上記のような三種類の疑問文の形式をとる文を疑問表現としてとりあげる。また、次のような名詞句化している例や従属節の例も含める。

(4) しゃんといそほに仰けるは、「風呂はひろきや、みてまゐれ。」とありければ、かしこまつてまかり出で、(367-14)

風呂の混雑状態を尋ねる内容で、疑問文が名詞句化している。現代語ではカドウカを付けて「風呂がすいているかどうか」という意味になる。

(5) 「さればとや、ただ今御辺の物語し給ふ事を、告げ知らせんとや思はれけん、犬二疋馳せきたられ候ふ。」と申ければ、(426-10)

「犬二疋馳せきたられ候ふ」の主節に対して疑問文「ただ今御辺の物語し給ふ事を、告げ知らせんとや思はれけん」が従属節になる。

しかし、明らかに感動表現と判断できるものは省く。(5)の「さればとや」は「だからこそ」という意味で、相手のことばを受けて発する語である。助詞「や」を含んでいるが、このような感動詞的用法のものは除く。なお、書陵部本・万治本ではこの部分に「とや」がなく、「されば」になっている。

2 肯否疑問文の形式

肯否疑問文は述べられた内容が成立するかどうかかわからないことを表す文である。小田(2007)は岡崎(1996)を整理して、古代語の肯否疑問文の基本形式をまとめている。その記述に基づいて三形式を示す。

I 助詞「や」を文中に用いる。(一や一連体形)

文全体の判定を求める場合に用いられる。文の表す事態が存在するか否かを問う。

II 助詞「や」を文末に用いる。(一終止形+や)

主として二人称主語に用いて直上の語句の真偽を問う場合に用いられる。

III 助詞「か」を文末に用いる。(一連体形/名詞句+か)

文全体の判定を求める場合に用いられる。断定文(「～なり」の文)の真偽を問う。

Iを係り結び形式、II IIIを文末助詞形式と呼ぶことにする。〈伊曾保〉の肯否疑問文の形式はすべて上記の基本形式に相当する。その形式を助詞の上接語や下接語、結びの有無でさらに分類し、会話文・地の文・心内文のどの文体に現れるかで分けて件数を示すと次のようになる。

表1 〈伊曾保〉の肯否疑問文の形式

形式		会話文	地の文	心内文	小計	計
I	一や一連体形	1	2	2	5	18
	一や	1	0	0	1	
	一とや一連体形	2	7	0	9	
	一にや一連体形	1	0	0	1	
	一にや	0	2	0	2	
II	一終止形+や	20	1	2	23	26
	一やいなや	3	0	0	3	
III	一連体形/名詞句+か	11	0	1	12	12
計		39	12	5	56	

以下、「一連体形/名詞句+か」形式を「一か」と略すこともある。

この表より次のことが指摘できる。

- a Iの係り結び形式は地の文に、II IIIの文末助詞形式は会話文によく現れる。
- b IIの文末助詞形式が最も多く、全体の半分に近い件数である。

3 係り結び形式

係り結び形式は中下巻によく見られ、上巻には1例しかない。助詞「と」や断定の助動詞の連用形「に」を受けない「一や一連体形」は全部で5例である。

(6) 狐申けるは、「… か程暑き炎天に、頭巾を被き、単皮をはき、ゆがけをさいて見え給ふは、もし僻目にてもや候らん。(439-10)

(7) 翁、げにもとや思ひけん、「若き者なれば、くたびれやする。」とて、わが子を乗せて、

(466-6)

(8) 主心に思ひけるやうは、「いかさまにも此鳥の腹には、大なるこがねや侍るべき。」とて、
(460-5)

(6) は狐から狼への揶揄を「もしかすると見間違いでもあろうか」と疑いによって表している。(7) は翁から子への問いかけではなく、翁の心内文で自問を表すと判断される。(8) は主の心内文であるが、副詞「いかさまにも」は確信を持った推測を表し、「きっと」と現代語訳できる。助詞「や」は疑いを明示せず、副助詞的に機能している。5例のうちの残り2例は地の文での使用で、反語(442-8)、疑い(466-6)を表す。「一や—連体形」に問いを表すものは存しない。

上巻に見られる係り結び形式は「一や」の1例のみである。

(9) かの入怒つていはく、「奇怪なり、いそ保。人の問ふに、さる返事する物や。召しいましめん。」と議せられければ、(368-3)

モノが形式名詞であれば、モノカのように助詞「か」をとる方が自然である。モノが人の意味であれば助詞「や」の後の結びが省略されている。その場合は、文末助詞形式ではなく、係り結び形式のうちの「一や」に分類されるものである。大系の頭注に「そのような(無礼な)返事をすべきものか。」とあり、モノを形式名詞と捉えて解釈している。書陵部本・寛永本では「さる返事する者や。」とあり、モノを人の意味で捉えたと考えうる。万治本では「さる返事する者やある。」とあり、モノが形式名詞ではなく人を意味し、係り結び形式で結びをとっている。書陵部本・寛永本・万治本には曖昧さを排していった跡がうかがえる。(9) は直上の「返事する」の真偽を問うのではなく、「人の問いかけにそのような返事はしない」という内容を疑問文で表現する反語である。係り結び形式のうちの結びが省略された形「一や」と判断する。

係り結び形式では助詞「と」を受ける「一とや—連体形」が9例と多くを占め、この形は「思ふ」と共起している。

(10) 「終り近づきぬ。」とや思ひけん、末期に云ひおく事有りけり。(401-13)

(11) これほどの事をだにわきまへぬやからは、能き事を見てはかへつて悪ししとや思ふべき。(459-10)

(10) のように推量の助動詞「けん」と共起するのが8例で、疑いを表している。そのうち、(10)を含めて6例は地の文で使用されている。(11) は地の文での使用で、教訓を述べる部分に見られる。助詞「や」ははっきりしないことを示し、副助詞的である。

断定の助動詞の連用形「に」を受けるものは全部で3例である^(註4)。

(12) 此出家の重欲心をさとつて申けるは、「… 然ども、御存知なきにや侍らん。此糸のこの臨終、さも有難くいみじき心ざしあり。(465-5)

(13) その所の人あまりに誇りけるにや、「主人を定めばや。」などと議定して、(415-3)

(12) は結びが存在するもので、ある人から出家への会話文に現れ、疑いを表している。他の2例は(13)のように結びが存在せず、地の文に現れ、疑いを表している。

以上、係り結び形式についてまとめると次のようになる。

- c 肯否疑問文のうち、三割強は係り結び形式であるので、形式としては係り結び形式が残っている。しかし、助詞「と」を受けて結びに「思ふ」をとる形が多く現れ、ほとんどが疑いを表しており、問いを表すものは存しない。係り結び形式は用法に偏りがあり、会話文での問いかけの用法からは後退している。

4 文末助詞形式「一終止形+や」

〈伊曾保〉の肯否疑問文で用例がもっとも多いのは文末助詞形式「一終止形+や」である。この形式は主として二人称主語に用いて直上の語句の真偽を問う場合に用いられる。しかし、〈伊曾保〉には、そうとはいえない用例が多数存在する。

まず、二人称主語に用いて直上の語句の真偽を問うものを取り上げる。「一終止形+や」の形が7例、「一やいなや」の形が2例見られる。

- (14) しやむと、かさねての給ふは、「我汝を買ひとるべし。そのとき逃げ去るべきや。」と仰せければ、伊曾保答へて云く、「われこの所を逃げ去らん時、御辺の異見を受くべからず。」と申。(363-7)
- (15) いそほしやんとに申けるは、「殿は智者にてわたらせ給へば、この文字の心をしらせ給ふや。」といふ。しやむと、「是は古の字なり。世隔たり時移つて、今の人たやすく知る事なし。」と仰ければ、(371-1)
- (16) 御門大きにおどろかせ給ひ、「われ此事を知らず。汝は知るや。」と仰ければ、おのおの口をそろへて、「見た事も聞き奉る事もなし。」といひければ、(397-4)
- (17) かの驢馬つくづくと此馬を見て、「さてもさても御辺は、いつぞやわれらをののしり給ふ広言の馬にてわたらせ給はずや。…」と恥ぢしめければ、返事もなうて逃げ去りぬ。(423-5)

これらは順に「逃げ去る」「知る」「知る」「馬にてある」ことの真偽を問うている。(14)の文末「べきや」は書陵部本・寛永本・万治本も同形である。終止形と連体形の合一化は他にも見られる。岡崎正継(1996)によると、古代語における二人称主語に用いる「一終止形+や」の形は、勧誘・依頼・受益の意志を持って相手の意志を問う意志質問で、ムヤ・テムヤ・ナムヤを文末に置く。〈伊曾保〉では(14)が意志質問であるが、それを除けば相手の意志を問うものではなく、ムヤ・テムヤ・ナムヤを文末に置くものもない。〈エソポ〉で(14)から(17)に対応する部分は次のようである。括弧の中に〈エソポ〉の頁・行を示す。

- (14)” シヤントの言はるるは、「買うてから後に、逃げうと思ふか? なんと」と。エソポが言ふは、「我逃げうと思はうずる時は、御辺へその御意をば得まじい」。(〈エ〉414-11)
- (15)” エソポシヤントに言ふは、「殿は学者でござれば、この文字をば何と弁へさせらるるぞ」と。シヤント…さらに弁へられいで、「この棺は上古に作つたれば、文字今は弁へがたい。汝知らば言へ」と言はれた。(〈エ〉419-6)
- (16)” 帝王…大きに驚かせらるる体で、諸臣下に「汝らはこの儀を見、聞いたことがあるか」と問はせらるれば、各々「かつてもつて見、聞かぬこととござる」と申せば、(〈エ〉441-4)
- (17)” 驢馬が立ちとどまつて言ふは、「ここを通るは、いつぞや対面した乗り馬ではないか? …」と恥しめて過ぎた。(〈エ〉460-9)

〈エソポ〉の(14)”・(16)”・(17)”は文末助詞形式の「一か」、(15)”は疑問詞疑問文になっている。

続いて、二人称主語に用いて直上の語句の真偽を問う「一やいなや」の例をあげる。

- (18) いそほ聞きて、「…されば、さきに問ふ所はなはだもつてわきまへやすし。汝継子と実

子を知るやいなや。…」。(366-10)

- (19) ある人しやんとを支へていはく、「御辺は大海のうしほを飲みつくし給はんやいなや。」
と問へば、やすく領掌す。(369-3)

これらは順に「知る」「飲みつくす」ことの真偽を問うている。が、(18)は問いに対する答えを期待しておらず、「さきに問ふ所」に対する答えを述べるための論法として疑問表現を用いたのであり、この問いの後には説明が続く。(19)は相手の意志を問う意志質問で、シヤを文末に置いている。「一やいなや」の形は漢文訓読の語法として発生したものである。改まった物言いをする場面で用いられているので、漢文訓読の語法の硬さが効果を上げている。〈エソポ〉でこれらの例に対応する部分は次のようである。

- (18)” その時エソポが言ふは、「…まづ只今の不審は、いとやすい義ぢや。譬へをもつて、その方に示さうず。…」と、いかにもありありと答へた。(〈エ〉 415-14)

- (19)” ある時、シヤント沈酔してゐらるる所へ人が来て、「大海の潮を一口に飲み尽くさるる道があらうか」と問ふに、シヤント、「たやすう飲まうずる」と領掌をせられた時、
(〈エ〉 417-19)

〈エソポ〉の(18)”は疑問表現ではない。(19)”は二人称主語に用いておらず、文末助詞形式の「一か」になっている。

第二に、主語が二人称でなくて直上の語句の真偽を問うものを取り上げる。「一終止形+や」の形が11例、「一やいなや」の形が1例見られる。

- (20) しやんといそほに仰けるは、「風呂はひろきや、みてまゐれ。」とありければ、かしこまつてまかり出で、…しやんとに申ける。「風呂には人一人にて候と見え侍る。」と申ければ、(367-14)
- (21) 長者あらがひて云く、「我汝が銀を預かる事なし。證據あるや。」と問ふ。商人、いかんと申事なくして、(382-8)
- (22) 主此由見て、「…いかさまにもただ人のしわざとも見えず。天魔の現じきたれるや。」とおろかにおそれて、(459-7)
- (23) かの鳥又申けるは、「…第一、あるまじき事あるべしと思ふ事なかれとは、まづわが腹に玉ありといふは、あるべき事やいなや。第二には、…」とぞ恥ぢしめにける。
(468-10)

これらは順に「ひろき」「ある」「現じきたれる」「あるべき事」の真偽を確認している。(20)・(21)の問いかけには相手の答えや反応が記してある。(22)は心内文に現れ、疑いを表している。(23)は「一やいなや」の形をとり、「第一の教え」の説明をしている部分に使われ、相手に答えを要求していない。〈エソポ〉に(21)・(22)・(23)に対応する寓話が存在しない。(20)に対応する部分は次のようで、疑問表現になっていない。

- (20)” ある時、またシヤントエソポに、「風呂に行いて人の多少を見て来い」と遣らるれば、…たち帰つて、「風呂にはただ一人居まする」と言うたれば、(〈エ〉 416-17)

上記と同様、〈伊曾保〉で問いを表すものに(456-11)(464-5)がある。

次のように推量の助動詞を伴い、反語を表すものが3例ある。

- (24) 狐申けるは、「あなおそれ多し。わがわけを奉るべしや。籠を一つ持ちきたらせ給へ。魚を取りて参らせん。」と云。狼かしこに駆け廻つて、籠を取りてぞ来りける。(437-13)

「わがわけ」は狐の食べ残しのことである。「奉る」の真偽を問う形で、反語を表している。同様に反語を表すものは(444-3)(449-10)である。

次のように感動詞「こはまことや」に似た形のものが2例ある。

(25) しゃんとおどろきさわぎ、「こは誠^{まこと}に侍るや。なにとしてあのうしほをふた口とも飲み候べき。いかにいかに。」とばかりなり。かくて有べきにもあらざれば、(369-12)

(25)は「誠にあり」の真偽を問う形で、「大海の水を飲み干す」と、シヤントがある人に約束したことを、イソホに確認している。同様のものに(388-6)がある。

次の例は不定語を持ち、確信をもって推測し、判断を述べているものである。

(26) いそほ高座の上より云けるは、「…いか様にも他国の王よりこの国の守護を進退せさせ給ふべきや。」と云ける。(375-2)

鷲が守護の指輪を奪って飛び去るという事件が起きたが、その意味するところをイソホが判じて述べる部分に見られる。「進退す」の真偽を問う形であるが、答えを要求していない。〈エソポ〉では平叙文になっている。

(26)「…他の国の帝王からこの里を押領せられ、その勅命の下にならうずるといふ義ぢや。」と言うて去つた。(〈エ〉427-18)

第三に、直上の語句の真偽を問うのではなく、内容の判定を求めるものを取り上げる。〈伊曾保〉に5例見られる。

(27) 御門、この由観覧あつて、「…かかるみにくき物の下知によつて、さんの者ども我が命をそむきけるや。」と、逆鱗あること軽からず。(376-12)

(27)はイソホの計略でサンの人々がリジヤの御門の命令にそむいたことを確認している。〈エソポ〉では文末助詞形式「一か」になっている。

(27)「国王エソポを観覧あつて、「さてもかかる見苦しいやつが所為をもつて、サモの者ども、わが命を背いたか。」と、大きに怒らせられたれば、(〈エ〉429-19)

(28) ある者は是を拾ふ。我家に帰り、妻子に語つていはく、「われ貧苦の身として、汝等を養ふべき財なし。天道これを照覧あつて、給はるや。」とよろこぶ事かぎりなし。(379-5)

(28)は疑いを表す文である。大系の頭注に「神が御覧になって、(お恵みとして)この銀子をくださるのもあろう。」とあり、推量の意味を補って解釈している。〈エソポ〉に対応する寓話が存在しない。

次の2例はともに主人シヤントの質問に答える会話文に現れる。話し手の認識が確認の対象になり、聞き手を誘導するデハナイカ文である。

(29) いそほ答へて云く、「…されば、諸肉の中において、舌はいちのめづらしきものにあらずや。」と申す。(367-6)

(30) 伊曾保答へて云く、「…三ずんの舌のさへづりをもつて、五尺の身を損じ候も、みな舌ゆゑのしわざにて候はずや。」と申すに、しゃんとこの事領掌して、(367-11)

〈エソポ〉では前者が疑問詞疑問文の形式で反語を表し、後者が平叙文である。

(29)「エソポ答へて言ふは、「…しかれば、天下・国家の安否も舌に任することなれば、何かはこれにまさらうずるぞ。」と申した。(〈エ〉416-9)

(30)「舌はこれ禍の門なりと申す諺がござれば、これに過ぎた悪い物はござるまじい。」と答へたと申す。(〈エ〉416-15)

〈伊曾保〉で同様のものに(468-13)がある。

以上、文末助詞形式「一終止形+や」についてまとめると次のようになる。

- d 文末助詞形式「一終止形+や」で二人称主語に用いて直上の語句の真偽を問うている場合でも、相手の意志を問うものは少なく、ムヤ・テムヤ・ナムヤを文末に置くものもほとんどない。
- e 文末助詞形式「一終止形+や」の中では、主語が二人称でなくて直上の語句の真偽を問うているものが多い。問いかけに対する答えや反応が記してある場合もあるが、相手に答えを要求していなかったり、反語を表したりする場合もある。
- f 文末助詞形式「一終止形+や」の中に、直上の語句の真偽を問うのではなく、内容の判定を求めるものがある。

5 文末助詞形式「一か」

文末助詞形式「一か」は11例である。

(31) いそ保答へて云く、「さればこそ、さやうに人にいましめられんことを知らざる事にて侍るか。」と申ければ、(ある人は)「こさんなれ。」とてゆるされける。(368-5)

(32) はすとりに申けるは、「わごぜはいつぞや助けける狼か。」といへば、狼答へて云く、「さればとよ、御辺のことはよかんなれど、御辺のまなこは抜き捨てたく侍る。」とぞ申ける。(429-4)

(31)・(32)は質問に対して相手の答えが記されている。助詞「か」が受ける文全体の内容に対する判定が「こさんなれ」「さればとよ」によって示される。(31)はある人の問いかけに「知らない」と答えてその人を立腹させたが、そのように答えた理由を述べるのに「人に叱られるなどと知らないことではないですか。」と反問する形をとっている。〈エソボ〉では疑問文でなく平叙文である。

(31)” エソボが言ふは、「私がただ今知らぬと申したことは、かやうに籠者せられうことを弁へなんだによつて、知らぬとは答へてござる。」と言うたれば、(〈エ〉 416-23)

(32)の「はすとりに」は牧人の意で、「ばすとる」の語形も現れる。〈エソボ〉の対応部分は異文になっている。

(33) かのうそ人、猿のそばに近づきて、例のうそを申けるは、「是に気高く見えさせ給ふは、ましら王にて渡せ給ふか。その外面々見えさせ給ふは、月卿雲客にわたらせ給ふか。あなみじきありさま。」とぞ讃めける。ましらこの由を聞きて、「憎き人の讃めやうかな。是こそ真の帝王にておはしませ。」とて、引出物などしける。(429-13, 14)

(33)は疑問文の形式のほめ言葉を肯定し、気分を良くした猿の反応が描かれる。「憎き」を「感心だ」の意味で解釈しておく^(註5)。〈エソボ〉に対応する段が存在しない。

以上、文末助詞形式「一か」についてまとめると次のようになる。

- g 文末助詞形式「一か」は文全体の判定を求める場合に用いられている。

6 おわりに

〈伊曾保〉の肯否疑問文の形式を文脈の中で表す意味との関わりを中心に整理分析してきた。その結果を改めて以下に示す。

- a Iの係り結び形式は地の文に、II IIIの文末助詞形式は会話文によく現れる。
- b IIの文末助詞形式「一終止形+や」が最も多く、全体の半分に近い件数である。
- c 肯否疑問文のうち、三割強は係り結び形式であるので、形式としては係り結び形式が残っている。しかし、助詞「と」を受けて結びに「思ふ」をとる形が多く現れ、ほとんどが疑いを表しており、問いを表すものは存しない。係り結び形式は用法に偏りがあり、会話文での問いかけの用法からは後退している。
- d 文末助詞形式「一終止形+や」で二人称主語に用いて直上の語句の真偽を問うている場合でも、相手の意志を問うものは少なく、ムヤ・テムヤ・ナムヤを文末に置くものもほとんどない。
- e 文末助詞形式「一終止形+や」の中では、主語が二人称でなくて直上の語句の真偽を問うているものが多い。問いかけに対する答えや反応が記してある場合もあるが、相手に答えを要求していなかったり、反語を表したりする場合もある。
- f 文末助詞形式「一終止形+や」の中に、直上の語句の真偽を問うのではなく、内容の判定を求めるものがある。
- g 文末助詞形式「一か」は文全体の判定を求める場合に用いられている。

〈伊曾保〉は肯否疑問文の基本形式のうち、係り結び形式を地の文で疑いを表す用法に偏在させることで残した。そして、文末助詞形式「一終止形+や」を頻繁に使用したが、その用法に変化が見られ、相手の意志を問うたり、答えを要求したりというものからずれていて、内容の判定を求めるものが存在する。文末助詞形式「一か」の使用がもっとも少ないが、その用法に変化はない。

ここで〈伊曾保〉と〈エソボ〉の肯否疑問文の代表的な形式を整理してみよう。

表2 〈伊曾保〉〈エソボ〉の肯否疑問文の代表的な形式

表現	〈エソボ〉	〈伊曾保〉
問い	一か	一終止形+や 一か
疑い	一か	一や一連体形
反語	一か	一終止形+や

この表で、〈エソボ〉の肯否疑問文の代表的な形式は「問い」「疑い」「反語」の別に関係なく文末助詞形式「一か」である^(註6)。これが室町時代末期の話し言葉に用いられていたと考えてよい。〈伊曾保〉の場合、「問い」「疑い」「反語」の別によって形式に使い分けがあり、文末助詞形式「一終止形+や」を多用する。

会話文で肯否疑問文の「問い」を表現する形式として、平安時代に文末助詞形式「一終止形+や」をよく用いたが、次第に文末助詞形式「一か」を用いるように変化していった^(註7)。その変化に表2の〈エソボ〉の形式は合致する。しかし、〈伊曾保〉の形式は当時の話し言葉とも異なる

り、また、日本語における肯否表現の変遷に逆行している。

この現象がなぜ起きたかという理由として、私は翻訳時の擬古的態度を推定している。〈伊曾保〉と〈エソポ〉には文語によって翻訳された共通の祖本が存在したと考えられる。この文語への翻訳の姿勢に擬古文への志向があったと推定する。〈伊曾保〉では会話文の中にも補助動詞「侍り」がよく出現する。この点も文末助詞形式「一終止形+や」の多用と軌を一にする。森田(1965)の解説には助動詞「た」「まじい」、ヤ行の「教ゆる」「添ゆる」、連体形終止、「こそ」による係り結びの破格などの現象から「国字本は、文語のいわゆる俗文体で書かれ、当時の口語の影響が著しい」とある。〈伊曾保〉にはこれらの現象も確実に見られる。〈伊曾保〉の翻訳は室町時代末期の話し言葉の語彙語法を取り込みつつ、室町時代前期までの文体を範として擬古的態度でなされたと推定する。

〈注 記〉

注1 柀(1960)は中川芳雄氏の版本調査に基づき、無刊記第一種本を「慶長元和頃と認めて慶元本といはれてゐる」と解説している。

注2 次の文献を用いて調査した。〈伊曾保〉…日本古典文学大系『仮名草子集』(岩波書店 一九六五年)所収「伊曾保物語」、影印…中川芳雄解説『古活字本伊曾保物語』国立国会図書館蔵本影印(勉誠社 再版1994年)、〈エソポ〉…大塚光信・来田隆編『エソポのハプラス本文と総索引』(清文堂出版 1999年)、書陵部本…『仮名草子集成』第三卷(東京堂出版 一九八二年)所収「伊曾保物語(寛永古活字版)」、寛永本…同「伊曾保物語(寛永十六年古活字版)」、万治本…同「伊曾保物語(万治二年板)」

注3 書陵部本・寛永本・万治本の関係は、森田(1965)の解説に基づく。

注4 断定の助動詞の連用形「に」を受けて文末を「や」で結ぶ形式のものの中には問いや疑いから大きく離れ、はっきり断定せず、やわらげて述べるものもある。

若しさやうに人の笑はん時は、退いて人の是非を見るべきにや。(454-2)

このような例は疑問文に含まなかった。

注5 大系430頁の注一に「『真の帝王』なのに『ましら王』と言ったというので憎んだのである。」とある。文意が通りにくい。

注6 柳田(1985)の(表11)『竹取物語』と『天草版伊曾保物語』の疑問表現形式による。

注7 磯部(2000)は文末助詞形式「一終止形+や」に関して次のように記述している。

g形式(文末助詞形式「一終止形+や」、著者注)は、『源氏物語』においては用例数も多く、会話文において「問い」の表現として主用されているが、時代が下ると共に用例数自体が少なくなり、その用法も「反語」や「依頼」表現に偏り、純粋な「問い」の表現としての用例はむしろ稀となってくる。

また、文末助詞形式「一か」に関して次のように記述している。

このj形式(文末助詞形式「一か」、著者注)は時代とともに使用率が高くなっており、特に会話文における「問い」の表現としての使用が一般化してきていると考えられるが、これは前述のg形式の使用率の減少、特に純粋な「問い」の表現としての用法の激減という現象と対応していると考えられる。

〈文 献〉

森田武(1965)校注・解説「伊曾保物語」(日本古典文学大系『仮名草子集』岩波書店発行)

柀源一(1960)「エソポのハプラス 解説」(新村出・柀源一校註『吉利支丹文学集』下、初版1960年 朝日新聞社、復刊1993年 平凡社)

磯部佳宏(2000)「古代日本語の疑問表現(下)——要判定疑問表現の場合——」、『山口大学文学会誌』50

- 柳田征司（1985）『室町時代の国語』 東京堂出版
小田勝（2007）『古代日本語文法』 おうふう
岡崎正継（1996）『国語助詞論攷』 おうふう

